

ラジオNIKKEI

マルホ皮膚科セミナー

2022年9月19日放送

「第38回日本臨床皮膚科医会 ①

大会を終えて」

島田ひふ科
院長 島田 辰彦

はじめに

第38回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会(以下大会)を2022年4月23日(土)、24日(日)に鹿児島市のかごしま県民交流センターで開催しました。

オミクロン株の猛威で新型コロナウイルス感染症患者数が多いままでしたが、学会登録者数1,609人中690人がリアルに会場参加を選択してくださいました。

日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

大会は、10ブロックの輪番制にて全国各地で開催していますが、現在、皮膚科の学会としては、日本皮膚科学会総会(以下総会)、日本皮膚科学会東京支部学術大会に次いで3番目に大きな学会に育ってきました。これまで九州ブロックでは、第6回大会(1990年皆見紀久男会頭)、第17回大会(2001年西本勝太郎会頭)、第28回大会(2012年津田眞吾会頭)の3回開催しました。また、一昨年来のコロナ禍で大きな軌道修正を余儀なくされ、第36回大会(2020年白濱茂穂会頭)、第37回大会(2021年早川道郎会頭)と同様に今回もハイブリッド形式で開催しました。

大会開催にむけて

私が九州ブロック長をしていた第35回大会(2018年町田博会頭)の懇親会で当時の若林正治会長から「3年後の2022年に総会を九州ブロックで担当してもらえないでしょうか」という一言から、本大会の準備は始まりました。まず、前ブロック長の松田哲男先



日本臨床皮膚科医会会長、江藤隆史先生と

生、現ブロック長の楠原正洋先生に相談し、九州ブロックでの開催を引き受けることにしました。次に会頭と開催地について、大学入学時からの同期で本大会の副会頭を引き受けてくれた盟友の西正行先生、医局の先輩でプログラム委員長もお願いした鹿児島大学の金蔵拓郎教授と協議して、私が会頭に就いて鹿児島で開催することを決意しました。そして、運営事務局を日本皮膚科学会学会担当チームにお願いし、日程と会場を決めて、日本臨床皮膚科医会事務局へ報告しました。

テーマ

私の座右の銘「日々是好日」とも繋がるのですが、コロナ禍の大変な日々であっても、皮膚科医にとって皮膚科診療は楽しいものであることは変わらないと考え、今回のテーマは、「こんな時代だから楽しい皮膚科」としました。本当は、「だ」の後に「った」を挿入して過去形とできたらと願っていましたが、残念ながら現在形のままでの開催でした。また、ロゴは、九州ブロック全県と桜島を入れて九州ブロックの鹿児島での開催と分かるようにし、ポスターは、大島紬の透かし柄をバックに鹿児島と言えば〇〇と県外の人がイメージしやすい物を多数あしらいました。

特別講演・シンポジウム

学会の魅力は、特別講演・シンポジウムなど充実した内容が一番です。プログラムを作成するにあたり、日本皮膚科学会学会担当チームから提出してもらった過去2年分の大会と総会の各セッションの参加者数実績のデータなども参考に、日常診療に即役立つ内容を中心に実行委員たちで検討して、3つの特別講演、31のシンポジウム、2つのハンズオンセミナーと委員会企画に27の共催セミナーで構成しました。

特別講演1は、医学部の同級生の一人、今村健志先生(愛媛大学分子病態医学講座教授兼副学長)に「革新的バイオイメージング技術が拓く次世代皮膚科」と題して、私たち皮膚科医が2次元で見ている病理の世界を3次元、4次元で観察した結果を解説して頂きました。

また、6月の選挙で日本医師会会長に就任された松本吉郎先生は、特別講演2「令和4年度診療報酬改定と皮膚科の今後の展望について」と題した講演をして下さいました。

シンポジウムの中には、団結は強いが個性も強い九州ブロックを全国に発信するために、各県支部長がオーガナイザーとなり、それぞれの県の皮膚科診療の一端を紹介する九州ブロックセッションも企画しました。

今回も立食形式での懇親会の開催は見送りましたので、学会終了後の夕食で本格焼酎を楽しまれることを想定し、文化講演で鮫島吉廣先生(鹿児島大学客員教授)に「薩摩の風土

第38回 The 38th Annual Meeting of Japan Organization of Clinical Dermatologists
日本臨床皮膚科医会
総会・臨床学術大会

こんな時代だから
楽しい皮膚科

会期 2022年4月23日・24日
会場 かごしま県民交流センター
鹿児島市山下町14-50

会頭 島田辰彦 (鹿児島県) 副会頭 西正行 (鹿児島県)
実行委員長 米倉 健太郎 (今村総合病院皮膚科) 幹事 吉井 典子 (吉井皮膚科)
プログラム委員長 楠原 正洋 (楠原皮膚科医院) プログラム委員長 金蔵 拓郎 (鹿児島大学)

運営事務局
公社団法人日本皮膚科学会 大会運営部 運営チーム
〒113-0033 東京都文京区湯島4-1-11 TEL: 03-3811-5079 / FAX: 03-3812-8799
URL: <https://jocd38.jp/>
E-mail: jocd38@dermatol.or.jp

と焼酎」と題した本格焼酎のお話をして頂き、サプライズプレゼントとして会場入り口でロゴ入りお湯割り用焼酎グラスの配布も行いました。

ポスター賞

一般演題はポスター発表のみでしたが、全国から日常診療をもとにした 65 題の応募がありました。前大会で試験運用されたポスター賞(公益財団法人マルホ・高木皮膚科学振興財団協賛)は今大会から正式な賞となり、プログラム委員長の金藏拓郎先生を選考委員長とした選考委員会で厳正に審査し、最優秀演題賞 1 演題、優秀演題賞 3 演題を選出し、学会から表彰状、財団から副賞(記念盾と賞金)を授与しました。受賞された先生方、おめでとうございました。本賞は次回以降も続きますので、若手先生からの応募をお待ちしております。

ポスター賞受賞者

最優秀演題賞：

「東京2020オリンピック・パラリンピックにおける皮膚科の活躍」
津田淳子先生(九段坂病院)

優秀演題賞：

「SARS-CoV-2ワクチンmRNA-1273の投与後生じる遅発性大型局所反応の疫学調査」
東野俊英先生(自衛隊中央病院)
「病変部の除圧に加え圧分散が有効であった糖尿病性潰瘍」
宮田聡子先生(さいたま市民医療センター)
「亜鉛化デンプンで消退した肛門部巨大尖圭コンジローマの1例」
貝阿弥瞳先生(大阪公立大学)

オンデマンド配信

今大会は6会場もあり、聴講したくても当日ブッキングして参加できなかったセミナーが出てくるのだろうと考え、初の試みとして、学会終了後オンデマンド配信を1ヶ月行いました。利用した先生には好評でしたので、次回以降も続けてもらえるとうい企画だと考えています。

総会を振り返って

大会は前日の理事会からスタートし、2年振りに会長招宴会も開催しました。オミクロン株の猛威で新型コロナ感染症患者数が増え、宴席の開催中止が相次いでいた会場の城山ホテル鹿児島島の担当者と協議して、コロナ禍前であれば200人規模で使用していた会場を82人で使用し、アクリルボードの仕切りを立てて原則1卓4人とし、感染対策を十分に配慮しました。招待者のみなさんは、薩摩料理をメインとした料理と本格焼酎もですが、久しぶりにリアルに会って会話ができることをさらに喜んでおられ、「人間は会話を楽しむ動物である」ということを痛感しました。

今回もハイブリッド開催をしたので、感染リスクが軽減でき、移動時間を気にしなくて良いので学会の初めから最後のシンポジウムまで聴講可能となるウェブ参加を選択する方が増えて、現地参加は少なくなるだろうと予想をしていました。しかし、学会初日の午前中だけでも400人以上の会場登録があり、事務局スタッフから「久しぶりに学会初日らし

い受付風景ですね」と言われ、大会の成功を確信しました。用意していたコングレバックと喫茶コーナーに用意した郷土の銘菓がどんどんなくなり、いずれもお昼前には追加発注をする嬉しい誤算もありました。

学会会場やロビーで知り合いを見つけては「久しぶりだけど元気になっていた？」とか「この会からリアル参加を復活します」などと挨拶をして再会を喜び、会話を楽しんでおられる様子や、講演を終えた講師と会場外でディスカッションをしている姿に、リアル参加の醍醐味を感じました。今回の学会を終えて得た私の結論は「こんな時代だけど楽しい皮膚科学会現地参加！」です。

おわりに

まずは、現地参加者から、一人の感染者も出すことなく大会を無事に終了できて、大会役員一同、安堵しております。そして、今大会に関わった全員の方にお礼を述べさせていただきます。運営事務局の日本皮膚科学会学会担当チームのみなさんには、学会準備から大会運営まで大変お世話になりました。協賛会社をはじめ、大会に参加して頂いた会社におかれましては、コロナ禍で大変な中ご協力を頂きました。開催にあたり、九州ブロック、鹿児島県支部、鹿寿会（鹿児島大学皮膚科学教室同門会）からも激励の寄付を頂戴し、嬉しかったです。改めて、参加した先生をはじめ携わったみなさんに御礼申し上げます、本当にありがとうございました。

なお、第39回大会は2023年6月17日、18日に札幌市のロイトン札幌で藤田靖幸会頭のもとで「新時代への飛躍」をテーマに開催されます。みなさんと学会会場で再会することができることを楽しみにしております。

